

## 大きく変化する日本の漁業や食生活を、築地市場から考える。

魚を中心とした伝統的な日本の食生活は、魚離れにより大きく変わりつつある。それに伴い漁業も、いま大きな転換期を迎えている。東京・築地市場を中心に取材活動を行っている「おさかなプロフェッショナル」川本大吾さんに、仕事の面白さ、大変さをはじめ日本の漁業、食生活についてのお話や提言を、うかがった。

### 朝の3時に起床、出社する生活。入社当初は慣れるのに苦労。

時事通信社は日々、取材したニュースや情報記事を全国の新聞社、企業などに配信しています。水産部は水産関係や水産物の市況などの取材・配信を専門に行っており、私は入社以来、主に東京・築地市場を担当しています。

大学時代は時事通信社の行政担当部署で、アルバイトをしました。お役所関係を扱う地味な部署でしたが、いきいきと仕事をしている記者さんに接して、私と年代はあまり変わらないのに学び、教えてもらうことも多かったですね。それと、生活に密着した取材もあれば、派手なニュースもあったり、ここは面白い会社、仕事だなと感じました。それが、就職を希望する決定的な理由となりました。社会的なニュースがいま、まさに生まれる……、そんな現場に立ち会うこともできる、という醍醐味もあります。

入社して水産部に配属されましたが、起床は朝の3時。生活の時間帯がそれまでと、まったく逆になりました。体調を整えたり、慣れるのに1年くらい苦労しました。身支度をして、会社契約の乗合タクシーで出社しましたが、目は覚めていても胃は起きていないような

状態でした。基本8時間勤務ですので午後2時には退社となり、あとは自分の時間になります。そういう生活リズム、勤務リズムを、つくっていきました。いまは、そうした勤務は毎日ではなくなりましたが。

### 食生活を正しい方向へ。それは、漁業や社会を変える力に。

入社後、20年余が経過しましたが、その間、時代とともに築地も変わり、私自身も変わってきました。当初の与えられた仕事をこなしていくだけの状態から、取材対象も築地に始まり、年を追うごとに水産庁、業界団体、生産者団体などに広がっていきました。魚は流通の経路や過程が非常に複雑ですが、そうした複雑な流れも生産地から築地市場、そして消費者という一連の構造が、自分なりに見えてくるようになり、問題意識を持つようになりました。築地市場が抱える問題は、今日の日本漁業の共通問題でもあります。

最近、日本の消費者の傾向として、魚は調理がやや面倒ということもあり、手軽で安い食肉が選ばれるようになってきました。残念なのは、日本の食生活の基本である魚を食べなくなっていることです。特に若い人たちの魚離れは深刻な状況で、日本の伝統的な食生活

### 川本大吾

時事通信社  
編集局水産部次長

かわもと だいご ●1991  
(平成3)年、経済学部経済学科卒業。時事通信社に入社。水産部に配属後、東京・築地市場で市況情報などを配信。水産庁や東京都の市場当局、水産関係団体などを担当。現在は、取材記者兼デスク。2010年から水産庁の漁業の多角化検討会委員。著書に『ザ・築地』(時事通信社)など。



が根幹から大きく揺らいでいることを、私は大変、危惧しています。これが進行すると、日本人の食生活をはじめ資源保護、漁業の問題にも、かかわってきます。若い人に新鮮で旨い魚をもっと食べてもらえるような、大きく言えば国家的なレベルで戦略を立案し、具体的には「魚を食べようキャンペーン」など、若い消費者を惹きつける魅力ある提案、積極的、持続的な活動が必要だと思います。

食を変える。それは、日本を変える……、と言っても過言ではないと思います。それほど食は重要ですし、私たちが記事を書いたり、いろいろな話をするので、いま一度、食を正しい方向に変える一助になればと考えています。(談)



『用字用語ブック』  
(時事通信社編)

「時事通信の内政部という行政ニュースを扱う部署で、アルバイトしていた大学時代。出先記者の原稿を見ながら、担当デスクが時折手に取り真剣に眺めていたのが印象的だった『用字用語ブック』。いまでは自分も常にすぐ取れる所に置いて、仕事に臨んでいる。何度も改定されているが、大事な強い味方といった一冊です」